

## 問題 1

次の文章を読み、以下の問い（問1～7）に答えよ。

あらためて、携帯電話の話から。

連絡が入る。それをどこでも受けることができる。「切って」おいても履歴は残る。メールも残る。すると話は後回しにしても、とにかくなんらかの反応はしておかなければならない。一日反応しないと、なんだということになる。「切ってた」と弁解するにしても、理由が要る。だから切るときにも、「切ってた」とあとで言うときの言い訳をもう考えている。それがうつつ<sup>↑</sup>とうしくて、携帯電話を手放すひともいる。

そう、どこからでもすぐに。ひととひととの交信は時差をなくした。空間の隔たりというものもなくした。電子の媒体が可能にしたそういう時差と距離のなさ、しかし、近すぎることもどかしさというものを、恋人たちに押しつけているのかもしれない。ままならぬ時間を心に織り込むことなく、思いがつのればすぐに話しかけることで、かえって交通が透明になりすぎ、滑ってしまう……というような。

手紙という媒体は、恋人たちにとってはもどかしいものであった。手紙を書く。最短の時間を計算して、恋人がそれを、食い入るようにか、（B）、読んでいる情景を想

像する。想像が心を浮き沈みさせる。そのふれは時間とともに大きくなる一方だ。ころうじてその揺れをおさめ、寝ついても、日が明けるとすぐに郵便受けに走る。配達時間にはまだまだ間があるが、ひよつとして夜のあいだに返事の手紙をじかに投函しているかもしれないとおもって。

しかし、愛人を待つということになると事情は一変する。自分に質問を發しているうちに時間は経ってしまう。期待の混乱は、思想のうちにはいつてしまう。しかも、「あの人は来るかしら」という質問は、「あの人は惚れてゐるのかしら」という質問と区別がつかぬ。小説家は、馬車の響きだとかベルの音だとかをよく描くものだ。身体のメカニズムにより、何の音でも特に期待している音は意外な音と同様、僕らの生命の根元まで震わせる、犬が蹄<sup>な</sup>いても震えるのだ、ただ人々が笑いの種にするだけのことだけである。こういう感動が、自分への記号になれば、未来はおのずから決まる。すべては自省する恋人を誤らせようと協力する、待つことは、自分は愛されているかと疑わせるからだ。しかし、また、待つ事は、自分が愛していることを確信させる、まあ以上のようなことを恋人は決して熟考するものではないが。

『精神と情熱』に関する八十一章』小林秀雄訳

これは、恋人が待ち合わせるときのじりじりした気持ちを皮肉ったアランの文章である。手紙の交換は、もつと時間がかかるので、心の振幅はさらに激しくなる。その振幅がぶち切れる寸前に、恋するひとはもう、返事が待ちきれないで次の手紙を書きだしている。二通、三通を矢つぎばやに書くこともある。ポストにひた走るその人の眼は、血走っている。

じつとしていられない。何かをして時間を埋めないと、間がもたない。ただ待つだけという空白の時間が怖い。でも待つしかない。相手のいることだから。そこで想像力がその空白を埋めにかかる。というか、辛抱しきれないで蠢きだす。想像はどんどん膨らみ、そのたびごとに必死で抑えられ……ということが続く。ぱんぱんに張りつめたとき、その限界のところで、気がつけばひとはポストの前に、いや、もつと走って恋人の家の前に、佇んでいる。思いつめて、呆然と、立ち尽くしている。

(鷺田清一『待つ』ということ』による)

問1 うつとうしくてとあるが、なぜうつとうしいのか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 誰かといつもつながっているから。
- ② 連絡がいつでもあつて応えなくてはいけなから。
- ③ 連絡を切ることにも理由があるから。
- ④ 無意味に連絡を取らないということさえもできないから。